

財団設立 3周年記念行事 シンポジウム&パネルディスカッション

第Ⅲ部 パネルディスカッション

まずは、文化財の価値とストーリー（物語）についてからはじめよう

【コーディネーター（CN）：清水】皆さまこんにちは。



このパネルディスカッションは、いまの基調講演と調査報告を受けて、パネルディスカッションを行います。壇上の5名の都市史、建築史、都市景観、都市計画、まちづくり、それから観光の専門分野は、今後、計画や事業を進めていくときに必ず欠かせないプレイヤーになると思っています。そういった意味でも、次の活動に向けて、今後どのように展開していくか、を主として議論できれば、と思っています。まず一番目が「東京の歴史や文化まちづくりがこれから目指すべき方向は何か?」、次に、そこに向けてどういうアプローチを取り得るのか、最後に基本構想の大義、即ち、何のために、誰のために、どういうことをやるのか、について改めて共通認識によるまとめをさせて戴きたいと存じます。

【パネリスト（PN）：海野】文化遺産の多様な価値観とストーリー化（物語）

私の話としては文化遺産の価値がどのように作られて、どこを重視しなくてはいけないのかの話と、昨今の文化財の活用に向けた文化財の考え方自体の変化の中で求められているストーリー化の話です。これらに対して、メリット・デメリットについてお話をさせていただきたいと思います。

そもそも文化遺産・文化財の価値は、例えば国宝・重要文化財といわれるような指定文化財に関して言えば、例えば法隆寺金堂、あるいは東大寺大仏殿といったような分りやすい文化財といった既存の価値観に価値が追加されてきました。例えば、近代の灯台なども重要文化財に入ってきており、「まちなみ」という意味で重要伝統的建造物群保存地区とか重要文化的景観とか多様な価値観というものが増えてきています。文化遺産の価値というのは、ある定点で定まったものではなく、時代に応じて変化して蓄積していく概念を有しているものということになります。



また、「桂離宮」は未指定の文化財ですが、未指定文化財というのが文化遺産として無価値であるということでは決してないということについて努々忘れてはならないということになります。

更に、文化遺産の価値という話、地形から各時代を積層させてきた価値というようなものが存在するという。文化遺産の作った人々や舞台あるいは場所の連続性といったような積層性という問題、更に建築というものの自体がもっている象徴的な意味だとか表現装置としての社会的価値、更に細かく見ていけば規模や細部といった違いということから社会における位置づけがみえてきます。特に建築に関して、都市との関係性で言えば、スケールが違う中でそれぞれ価値があるということを常に理解しておかなくてはなりません。それは小さいところと言えば、建築あるいは集住していく集落、そして都市を形成していく、そのバックグラウンドには地形があるわけです。この全ての部分で価値をそれぞれ把握していくことが必要です。

ただし、この文化遺産というのは一目では価値が分らないということも忘れてはいけなくて、ここの顕在化というのはやはりキーになってくる訳です。

わからない価値は調査を通して明らかにする。これは、今回、調査研究委員会のスタート、最初ですので、ここの中が大変に重要になってくる。これを踏まえてリストアップによる把握の重要な作業は、価値を理解しやすいストーリーとは別に非常に重要な要素です。一方で、デメリットの一つは分りやすいものだけが価値があると誤解されやすい点です。この危険性は避けなくてはならない。ストーリー性の流れは社会との共生とい

財団設立 3周年記念行事 シンポジウム&パネルディスカッション
第Ⅲ部 パネルディスカッション
 過去から学び再発見する-環境破壊やジェンダーの問題

う意味で可能性を秘めているのですが殊に建築文化遺産に関して言えば「本質的な価値」をきちんと把握していくことが、これまで以上に求められるのではないかと思います。

ローカル・プライドは地域のブランド化へ
 最後に、外部の専門家により客観的な指標で調査することは重要でそれをストーリー化し、ローカル・プライドをもった語り部的にストーリーを紡いでいく作業が今後出てくると思います。ローカル・プライドは地域の中心になる要素もあり、地域をブランド化するという意味でも、こういった文化遺産はコアになってくると思います。

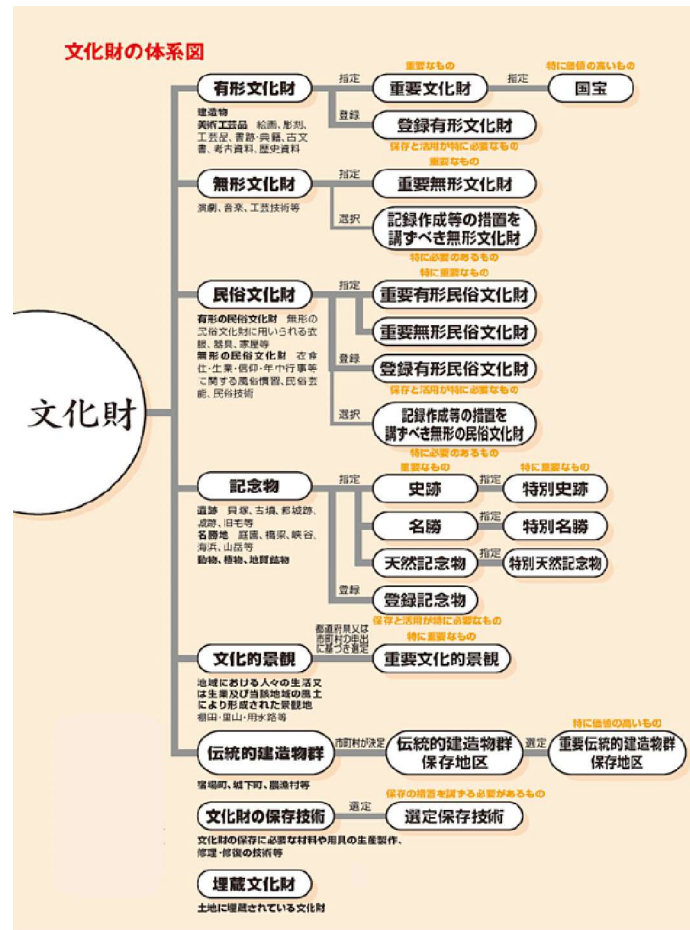
例えば原爆ドームは、原爆を受けた歴史によって、価値が付いているものです。また現代における価値というのが未来における価値とイコールではないこと、そして未来に文化遺産を享受できる権利を確保するということが重要です。現代の我々が文化遺産を使い倒していいのではなくて、未来に文化遺産を享受できる権利というものと相互関係をきちんと考えながら遺していかなければいけないと思います。

【パネリスト (PN)：岩淵】 過去から学び、現代の問題を再発見する、というストーリーも必要
 過去は現在の鏡、「鑑戒」(Mirror of modernity)

過去は現在の鏡です。史書編さんの基本となる「鑑戒」という中国の言葉があるように、過去から何かを学ぶということが重要です。文化財の活用においてストーリー化(物語)をすすめる際には、明るい過去像を描きがちですが、こうした「鑑戒」という視点にたった時、それだけで良いのか、ということをお願いしたいのです。私は現代の問題の原点・出発点という考え方をストーリー化の中に入れていく必要があるのではないかと、暗い過去と暗い現在、そういった見方も必要なのではないかと思っています。



一つには、近年、環境の破壊は近現代の産物ではなくて、それ以前からはじまっており、人為的な自然という舞台の中で人は生活していたのだ、という考え方が提起され、地質年代のとして「人新世」が提唱されています。この見解に従えば、都市では当時、最大規模の開発が実施されたということになります。陣内先生はお話の中で自然と共生していくという部分を強調されましたが、カルチャーランドスケープというご発言があったように、その自然とはまさに人為的な自然であり、江戸時代の人々はそのもとで生きていたのです。したがって、その結果、遭遇した災害について、火災や洪水の供養碑などもストーリーに入れていく必要があると考えます。



文化庁 HP より

財団設立 3周年記念行事 シンポジウム&パネルディスカッション
第Ⅲ部 パネルディスカッション
 多様な存在・地域とどう連携するか

二つ目の視点は、当時の社会の問題になります。江戸時代の社会には身分制が根幹にあり、さまざまな差別や問題をはらんだ社会でした。たとえば、多くの町人は狭い空間に、そして低地の底に住んでいたわけです。また、ジェンダーの問題では女性の問題のみならず、たとえば男性の娼婦も存在します。これらを有形の文化財で示すのは難しいですけども、遊女の投げ込み墓などが例としてあげられましょう。

また、都市社会の問題としては、たとえば寛政の改革で設置された、都市流入民のうち物乞いのような人々を収容する人足寄場があげられます。これを、単に更生施設と評価するのではなく、貧困と権力の問題としても示す必要があるでしょう。捨て子や迷子の問題としては、迷子石などがあげられます。江戸の都市社会がはらんでいた問題も意識して、ストーリーを構築すべきと考えます。

【パネリスト (PN)：福井】 歴史文化とまちづくり「地域とどう連携するか」

外濠については、環境改善や歴史に多くの大学が研究成果を上げてこられました。それを基にどうやって地域にそれを還元していくのか。外濠市民塾もそうです。それで実はこの時期に、外濠を開発したいとの要望もでてきて、それを止めながら、歴史文化を大事にするかという複雑な活動をして参りました。それで、「玉川上水・分水網を生かした水循環都市東京連絡会」の提言を通して最終的には東京都まで提言した経緯の話になります。



最初は勉強から機運が高まり、昨年3月に外濠再生憲章により将来の考え方を提示しております。ワークショップや地域や学生、企業の方々とは色々議論をしたんですが、外濠の将来像として外濠開削400年にあたる2036年に向けて実現したいという地域の要望を表しました。江戸東京は非常に大きく多様な存在があり我々のような研究者、学生、住民の方、商店街の方、企業の方、中高の教育機関もあります全然違う立場で関わる特徴や面白さがある。企業市民という言葉にあるように、この活動も最初、地域のD社等の声掛けから始まり、複数企業が外濠について何かしたいという声があがりました。江戸東京の歴史性や研究、個人的な体験を加え議論を繰り返すことにより活動は、「シビックプライド」に繋がっていくと思っています。

歴史性の理解と尊重と自分の生活意識とは多分表裏一体で、自分の環境として捉えるということを一生涯懸命やっています。そうすると安易なストーリーじゃなくて本当に何が大事なのかってことを理解することに前向きな人が非常に多く学校や地域と関連したことのメリットが大きいので、今後も活かしていきたいと思います。石垣があり、上水があり、地形とまちの関係も風景の点ではわかりやすい、しかし、江戸東京を成立させているシステムの伝え方は難しく、単なる有形文化財の集合体ではなく、それらの関係性が生み出している価値をどうやって表現するかということが我々の課題ではないかと思っています。



「外濠再生懇談会」資料より

第Ⅲ部 パネルディスカッション

市民の日常生活の歴史的文化的環境が大事

【パネリスト (PN) : 中島】 日常の中の歴史的環境こそが大事



歴史まちづくりは、歴史や文化がトータルな日常生活の中でどのようにあるのか、その状態が大事なのではないかというお話をしたいと思います。つまり、歴史文化まちづくりを構想していくというのは、文化財がある生活、地域、近隣、つまりそこに住んでる人の日常をイメージして、こういう歴史や文化がある暮らしが面白いんだとか楽しいんだとか、大事なんだと言っていくのが大切ではないかと思います。例えば御茶ノ水をボートで楽しむというのも、それが日常の中で、自分の生活体験としてあるということが大事だと思っています。江戸城の話でも環境も含めても、やっぱり江戸城の歴史文化を残しながら一体、私達はどんな生活をし、このまちでどんな体験をしたいのか、のストーリーを描いてくのが大事だな、と思いました。

特に若い世代は、エコロジカルで歴史や文化に触れられる生活を好む傾向にある。現在、そういう風に生きたいという若い人たちが増えている。ヨーロッパはそういう意味では連綿とある生活像が受け継がれてきたのではないかと思います。アメリカは1990年代、行き過ぎた自動車社会に対して、かつてのアーバニズム（都市的環境で創りだされる人間の生活様式）を取り戻しつつ、現代的なテクノロジーで現代の課題に答えながら新しくしていくというニューアーバニズムに転換しましたが、陣内先生のお話しは、ある種の日本版のニューアーバニズムとも呼べる未来志向の歴史のとらえ方であり、この都市でこういう生活をしたいというビジョンが感じられ共感するところがあります。

そういう観点から、江戸城の歴史文化まちづくりの話もトータルに我々の生活をどう豊かにするか、その場を介して如何に豊かな人生を送るかという妄想を楽しみながら、ストーリー（物語）とか構想を考えていくのではないかなと思っています。

【CN : 清水】 生活に密着した歴史や文化の多様性で、新しい観光をつくる時代

4人の先生方から、2つの重要なメッセージがあったと思います。

一つ目は、目に見える分りやすいだけではない文化財、文化資源の価値を、如何に継承し未来の権利、将来世代のことも考えていくか。その為に現在の世代の身勝手に壊さないことが重要という論点がありました。一方それだけだと不十分で、今の生活とか歴史や文化がどういう風に日常に関わっているのか、その意識や活動がないとムーブメントにならないと思いました。このままいくと東京は、世界の中で見ても「行きたい都市」にならなくなってきています。東京は、わかりやすい文化財の側面からは非常に危機感があります。

都市東京をどうするか、東京は文化として理解されてない可能性が結構強いとの声もありますが、それらをどう捉えるかは重要だと思います。やはり、地域に生活に密着した歴史や文化の多様性で新しい観光をつくることは大事な取組みだと思っています。陣内先生のお話も縄文の時代から江戸へ、川の上流から広いエリアでのストーリー展開が可能だと思いますし、江戸城周辺からより広域性を持ったストーリーの方が、この後に話が進めやすいと思いました。

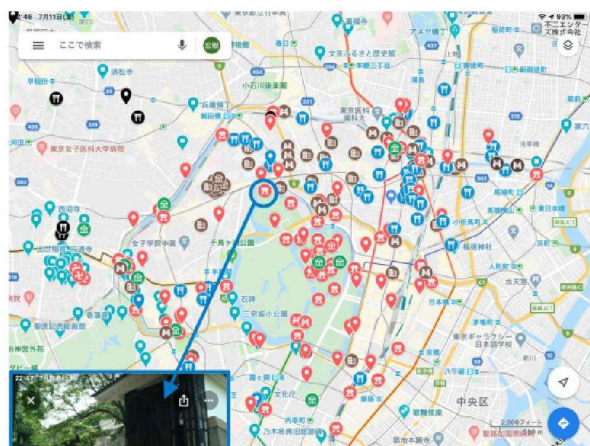
財団設立 3周年記念行事 シンポジウム&パネルディスカッション

第Ⅲ部 パネルディスカッション

地域から市民参加による民主的な「プラットフォーム」の創立に向けて

【CN：清水】現場から地域から、民主的な「プラットフォーム」に向けて

この3年間で、基本的なことを検討し、進むべき方向性が決まり、次の課題としてプラットフォームを含めて、どうアプローチの仕方が有り得るのかについて、少し自由に議論したいと思います。



歴史文化遺産やまちづくりをHPなど多様な媒体での情報発信を検討

江戸東京に残る歴史文化遺産の情報地図等を広く一般社会に公開して参ります。

先ずは、今回調査した600の歴史文化遺産をデジタル上に地点表示し、さらに「江戸復興地図」や現代図をデジタル化して観光などに活用できるように、これを契機に中期の事業として、順次、取り組みを漸進していきます。

※「歴史文化遺産」の当会の定義は、日本の文化財（有形・無形）をはじめ未指定の文化財及び地域固有の地域遺産など多様な歴史と文化を発見し、総合的に位置付け、まちづくりに活かす「遺産」を「遺産」として取組み、地域に、次世代に継承して近未来に託す遺産のこととします。

【PN：中島】プラットフォームの一つは文化財も有形・無形の様々な種類のものがあったり、国、都、区で指定・管理がバラバラになっているものを空間的なGISで一元的に把握するプラットフォームが、一つのレベルとしてはあります。

もう一つは、これまでの議論で出ているキーワードである「地域」との関係で構想されるものです。文化財や地域の歴史文化をどういった人々が構想し担い手となるかといえば、それは地域の人たち自身だと思います。しかし、地域の個別の活動だと出来ないこととか、共通で困っていることとかもたくさんあります。それらに対応して、ボトムアップの地域の動きを支援する、導き出していくようなプラットフォームもあるのではないのでしょうか。

この財団の位置づけと役割について考えると、そもそもトップダウン的な指向性をもっているわけではないし、市民運動としてスタートしているので、民主的なプラットフォームは、どうあるべきなのかっていう議論になるのではないかと思います。

【CN：清水】企業参加について

先程の外濠市民塾の活動のなかで、特に参加されている企業市民の方々が入ってくるときにどういった想いや期待感で入ってきて、このような活動に資金や支援が必要な時にそういう方々がどれほど貢献してもらえそうか感触を伺ってみたいです。

【PN：福井】企業が営利目的などで直接実現したいことを外濠市民塾を使って実現することは難しいでしょう。企業活動とは関係なく「長期的にみて会社のイメージアップに繋がる」とか、「東京の将来をどうしようか」ということをまじめに考えている方とのおつきあいが長続きしますね。資金はあまりかかりませんので、知恵の支援がありがたいです。建設関連ではない組織が繋がっていくところは大事にしたいと思っています。

【CN：清水】確かにそうですね。どんな世界でも、元気がないときに、一番、最後まで想いをもって協力してくれそうなおもしろい期待できないことは、観光の立場でも共感できます。

SDGs 第三部 パネルディスカッション 持続可能な開発目標に向けて-つくる責任・使う責任、住み続けられるまちづくり

【CN：清水】海野先生と岩淵先生のほうで、どういう活動があった方が良いか、如何でしょうか？

【PN：海野】21世紀型 SDGs 持続可能な社会の形成と歴史的建造物やまちづくり

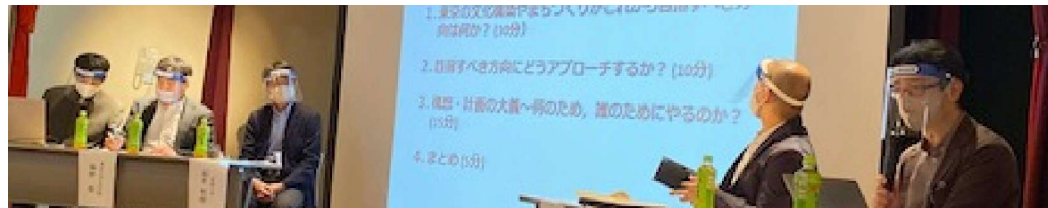
高度経済成長期のような考え方とエコロジカルで歴史文化を好む傾向にある若い世代の考え方は違う様相とのことでしたが、最近のSDGs持続可能な社会の形成は、歴史的な建造物の緩やかに変化し続けて長生きする考えと非常にマッチすると思います。プラットフォームでは、語り部の様なものができれば別の地域でも情報共有が可能なプラットフォームは発展の可能性は十分に秘めていると思います。

【PN：岩淵】プラットフォームは、市民参加が重要なポイント

私は博物館に長くおりましたので、市民参加が重要なポイントだと思います。自治体によっては、市民が選んだ文化財を登録する制度を設けたり、また自治体史編纂で市民参加の手法をとるところもございます。このプラットフォームは、対話とか話し合いの場としてうまく利用できたらと思います。

【CN：清水】大学との連携の可能性

このプラットフォームで思うところは、多様な活動体を尊重しつつ、最終局面では、どんな立場の人がリードするかの問題があります。多分行政ではないでしょうし、研究や実績から大学はその可能性があると、法政大学さんを中心とした活動は、非常に期待感が持てると思っています。



【CN：清水】江戸城等全体整備構想を策定していく場合、何の為に誰の為にやるのだろうかということについて最後に議論したいと思います。其々の立場からご放言を戴きたく思います。

【PN：岩淵】私は、それは「市民」、地域住民のためだと考えます。そして観光収入などだけに収斂するのではなく、個人レベルの生活で位置づくためのストーリーであるべきだと思います。参加だけではなく、企画から市民が考えるということも重要でしょう。文化財の保護と観光の振興の狭間で、明るい過去ばかりを描かないストーリー化を誰がリードするのか、がこれからの課題だと思います。

【PN：海野】私も基本的には市民。特に「地域の住民」が、「ローカルプライド」をもって歴史あるものとのように共存していく気があるか、そこが無い中でその「シビックプライド」を醸成するのはまず難しいだろうと。語り部の話でいうと個人が持っている想いは、多様であって、矛盾するものも共存する可能性があると思うしそれが新しい価値を伝える一つの方法になるのではないかと思います。

文化財保護の関係でいうと、お金を稼ぐことだけが価値ではないと肝に銘じておく必要があり、文化財と共生していくことも十分あり得ると思うし、観光との関わりについては、万人向けではなくコアなところで受けるという高付加価値化する方向性は十分に有り得ると思います。

第三部 パネルディスカッション 多様な歴史文化資源を活かした新たな都市計画、そして観光まちづくりへ

【PN：福井】今回の江戸城の話では、学術的な調査研究によって本質的価値が何か、それをどうするかという話になっています。それは核心としてとても重要なことです。ただそれを社会的に展開していくときには学術だけでは理解を得られないことが往々にしてあります。極端な話、歴史文化で儲かる人も必要です。つまり、学術分野での議論、利害関係者を説得するストーリーなど、相手に通じる言葉や論理を選ぶことが重要だと思います。

【PN：中島】ある企業が谷中に未来定番研究所というサテライトオフィスをもっています。それは商品企画部門なのですが、何かを発想しようするとき、谷中というまちの持つ歴史文化の中で働くことでこそ生まれてくるものがあるんじゃないかという企業判断です。これからはそういう観点からも、歴史や文化の豊かな場所が選ばれていくと思うんですね。

歴史文化性の環境の中で働く、集う、例えば、江戸城のある場所で、江戸の歴史や文化を感じるパブリックスペースがあり、そうした環境の中で、何か新しいものを生み出していくというアピールができれば東京でも構想できると思う。そうすると企業さんもしっかり関わるだろうし、例えば、観光の方でもリモートの時代では、観光の概念が生活や仕事と溶けあっていく中で、東京の歴史的文化的環境の中で半年働いてみたい方とか、そういった多様な人を国内外から受け入れていく、すると東京が活力を維持し発展していけるのかなと思います。江戸城の理念とかビジョンとかは自由に広げて考えていながら、一方で現実の江戸城の足元をしっかり考えて進めたら良いのではないかと思います。



【CN：清水】次なるステージ・今後に向けた課題

観光やまちづくりの立場から観ると、地域住民やそこで経営している企業の方とか、彼らの誇りや満足にも目を向ける状態にしていかないと多分観光地も選ばれない時代に既に突入しているようです。このことは、観光地のリーダーの方々も確実に自覚をされています。最終的には、地域の歴史や文化に紐付いた文化を大事にするところが勝ち残っていくのではないかと、今回の我々の基本的な調査研究の取組みもそのベースの一つで、10年20年50年100年後に振り返った時にも、非常に重要な取組みであったと、思わざるをえないと思います。

この調査・研究委員会は文化財等の調査からスタートしました。文化財のリストアップは、息の長い活動になると思います。従って、次は、歴史文化資源を都市の計画や経営、そして、次には観光にもどう活かしていくのかの議論が必要になると思います。この調査・研究委員会の役割も変わる潮目にきているのではないかと今日の議論聴いて思いました。それでは関係者の皆さんに謝意を表してこのパネルディスカッションを終わりたいと思います。ありがとうございました。

第Ⅲ部 パネルディスカッション 第一線で活躍する気鋭の研究者へ 期待こめたメッセージ
調査研究委員会アドバイザー、(一社)日本イコモス国内委員会事務局長 矢野 和之

今日は非常に貴重な話を有難うございました。

皆さまは、これから活躍される、今も活躍されていますけど、これから一番脂ののった活動される方々だと思います。かなり「うんうん」と肯くことが多かったですね。

文化財は、無色透明だったりするんですよね。でも実は7色があって、トータルで無色に見える。そういうものだと思っています。ですから、いろんな立場でいろんな価値がでてきます。確かにネガティブなものも見なきゃいけないですが、それで厚みが出てくると思うんですよね。

今日のシンポジウムは本当に良かった。3年前に私が財団から江戸城天守復元の相談を受けて、それは極めて困難ですという話から始まり、この場を設定して頂いたということになる訳で、本当にこれからやるべきことが沢山あると思いますので、よろしくお願ひいたします。どうも有難うございました。



閉会ご挨拶

一般財団法人 江戸東京歴史文化ルネッサンス 副理事長 齋藤 蒔

本日は招かれざるコロナが跳梁する中で大変長時間に亘り、諸先生の熱心なお話を拝聴することができて、本当にありがとうございました。

先ずは陣内先生からの水都論、そして後藤様からは地道で緻密な調査の成果、締めくくりには、大変なボリュームがあり、熱意・示唆が頂けました、気鋭の先生方の迫力あるディスカッションを展開していただきました。これは後々しっかりと想いを刻み込んで取組んでいかないといけない、という気持ちになっております。

まさに超高層ビルが印象的に海岸部に点在しているんですよね。それが文化、といういか文明の進歩であるかの如く思っている若い人たちも多いので、これからの我々の取組みは大変重要で大事さがあるのではないかと考えております。

今後とも想いを同じくしていただく先生方にご指導いただきまして、是非、江戸東京を近未来における世界遺産に相応しい存在にできればと念じているところでございます。そのような意味で、熱意あるご支援をいただき、これからもがんばっていきたくと思っています。心から願ひを申し上げて、締めくくりとさせていただきます。本当にありがとうございました。

一般財団法人 江戸東京歴史文化ルネッサンス

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-25-6-1023

Eメール zaidanedojo@gmail.com ホームページ <https://zaidan-edojo.or.jp/>

※事務所移転、メールアドレス変更しております。

また、現在、新型コロナウイルス対策のため、テレワークを中心に活動致しております。ご用の際はEメール若しくはハガキ等郵送にて頂ければ幸いです。

財団設立 3周年記念行事（2020年10月18日）

シンポジウム&パネルディスカッション

近未来の世界遺産を目指し
江戸城等全体構想を視野に入れて
江戸東京の歴史文化資源を活かした
観光まちづくりの形成を目指す

参加メンバー

*総合司会 川野 恵可 （一財）江戸東京歴史文化ルネッサンス 理事

1) 共催者ご挨拶

小竹 直隆 （一財）江戸東京歴史文化ルネッサンス 理事長
苅谷 勇雅 （一社）日本イコモス国内委員会 副委員長、元文化庁文化財監査官

2) 来賓ご挨拶 本保 芳明 国連世界観光機関 駐日事務所 代表、初代観光庁 長官

3) 基調講演 陣内 秀信 法政大学江戸東京研究センター 特任教授

4) 調査報告 後藤 宏樹 都市史研究家

5) パネルディスカッション（パネリスト・調査研究委員会 委員）

岩淵 令治 学習院女子大学 国際文化交流学部 日本文化学科教授
海野 聡 東京大学大学院 工学系研究科 建築学専攻准教授
○清水 哲夫 東京都立大学大学院 都市環境科学研究科教授（調査研究委員会 座長）
中島 直人 東京大学大学院 工学系研究科 都市工学専攻准教授
福井 恒明 法政大学 デザイン工学部教授

*アドバイザー（調査研究委員会）

苅谷 勇雅 （一社）日本イコモス国内委員会 副委員長、元文化庁文化財監査官
矢野 和之 （一社）日本イコモス国内委員会 事務局長、文化財保存計画協会代表

*オブザーバー（調査研究委員会）

小竹 直隆 （一財）江戸東京歴史文化ルネッサンス 理事長
齋藤 蒔 同 副理事長

*事務局（調査研究委員会）

内田 久江 同 専務理事
山崎 麻央 同 理事
後藤 宏樹 都市史研究家

